

高等学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（音楽）

東京都教育委員会

平成 6 年 度

教育研究員名簿（音楽）

学 区	学 校 名	氏 名
2	都 立 新 宿 山 吹 高 等 学 校	繁 田 卓 也
5	都 立 忍 岡 高 等 学 校	稲 井 泰 子
8	都 立 立 川 高 等 学 校	瀬 戸 宏
8	都 立 秋 川 高 等 学 校	千 原 卓 也
9	都 立 田 無 高 等 学 校	坂 本 みどり

担当 都教育庁指導部高等学校教育指導課

指導主事 神 原 陸 男

研究主題

音楽活動を活性化させるための効果的なグループ学習の在り方

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	3
1	音楽の授業を活性化させるためには	3
2	グループ学習	4
(1)	グループ学習の意義及び効果	4
(2)	グループ学習の諸形態	4
(3)	グループ学習における指導の在り方	5
(4)	グループ学習における評価の在り方	6
3	指導事例	7
	指導事例1 「生き生きとしたリズムアンサンブルを味わうグループ学習」	
	音楽Ⅰ	7
	指導事例2 「グループ学習を取り入れた合唱活動」音楽Ⅰ	10
	指導事例3 「自分の得意な演奏手段で楽しく合奏しよう」音楽Ⅰ	13
	指導事例4 「バリ・ガムランによるアンサンブル感覚の育成」音楽Ⅱ	16
	指導事例5 「2時間で仕上げるリコーダーとギターの重奏・合奏」	
	音楽Ⅰ	20
	指導事例6 「現代音楽的な音空間の中でグループ即興演奏を楽しむ」	
	音楽Ⅰ	22
IV	まとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

現在の私達をとりまく社会環境は、多くの人々が指摘しているように変化してきており、それは音環境にも確実に影響を及ぼしている。たとえば、普段の生活の中で静寂を求めることは難しく、絶えず何かしらの音が鳴り響いている。また、情報化が進み、音楽の情報もあふれている。そのこと自体は悪いことではないが、このような状況は自発性あるいは集中力などを緩慢にさせてしまう可能性もある。

このような環境の中で、現在の学校音楽における高校生の実態を考えると、以下のような傾向が挙げられる。音楽の存在は日常的なものであり、音楽の好きな生徒は多いが、その嗜好が多様化、個性化していること、音楽的な能力の個人差が大きくなっていること。そして、とすると自分の好みの音楽にだけ熱中し、他の音楽への拒絶感があること。その場限りの心地よさに満足し、面倒なことや努力をしてまでも一つのことを遂行しようとする意欲が低下していること。そして、人よりも目立つことを嫌い自主活動が苦手で、他者との共同作業を進めていくような協調性に乏しいことなどである。

このような生徒の実態は、社会環境や生徒個人の実情にも起因することが多いが、音楽教育の在り方と深くかかわっている。今後、更に多様化、個性化していくであろう生徒の実態を考えると、教師はより密度の高い一人一人の生徒理解を求められる。また、他の教科に比べるとこのことへの音楽科が果たす役割はより大きい。そして、先に挙げたような傾向の中でも、音楽に対する意欲、自主的な姿勢や、対教師あるいは生徒相互のコミュニケーション、協調性といったものは、これまでの音楽教育の中では育成されにくかった面もあるが、これからの音楽教育では育成すべき大切なことの一つであろう。他者とのコミュニケーションの中で音楽的な感性の相互交流を通して意欲的、自主的に音楽活動を行い、その表情の喜びを味わい、自信と更なる音楽活動への意欲が育成されるならば、学校での音楽活動はより活性化され、生涯学習の基礎を培うことになるであろう。

それではどうすればこれらが育成され、音楽活動をより活性化させることができるのだろうか。本年度の教育研究員の勤務校の生徒や学校の実態は異り、その共通項を探っていくことは難しかったが、本研究では授業形態の改善に研究のスポットを当てることにした。従来の授業形態の主流は一斉指導である。そこでは生徒一人一人と接する時間が限られ、どうしても指導が一方向的になりがちで、生徒の自発性、協調性を促す場面は少ない。そこで、これらの短所を克服するための一つの方法として、グループ学習に取り入れた指導について検討することとした。そもそも音楽は、その作品が作られ、演奏され、聴衆に聴かれることによって初めて音楽となるという集団性の要素を持っている。これまでも場面に応じて取り入れられてきたグループ学習ではあるが、これを更に積極的、系統的に授業の中に生かすことにより、先に挙げた生徒理解および生徒の意欲、自主性、協調性の育成などの可能性が広がるのではないかと考えた。

以上のような考えに基づき、今年度の研究主題を「音楽活動を活性化させるための効果的なグループ学習の在り方」と設定した。

Ⅱ 研究の経過

今年度の5名の教育研究員の所属校は、全日制課程、定時制課程（単位制）、全寮制の高等学校であり、5名が共に研究していく共通の課題として、なにを目指すべきかを十分論議する必要があった。

そのため、本研究は5校の音楽教育の実態を相互に把握することから開始したが、「いかにしたら、より活性化した授業ができるか」が5校の当面の共通の課題であった。論議の際には、一斉指導のみによる学習展開では不十分であること、一人一人の特性等に応じた指導形態の工夫が必要であることなどが多く出された。

その結果、「グループ学習によって一人一人の音楽活動を活性化していくことが重要な解決策となる」との共通認識に立ち、研究を進めることとした。なお、研究の主な経過は次のとおりである。

5月：研究の方向性についての考察。研究主題の設定。

6月：グループ学習の具体的な考察。各学校で、どのようなグループ学習が可能であるかについての議論。

7月：各学校のグループ学習の事例を持ち寄り検討。

8月：研究主題設定理由の共通理解。研究の内容の確認。グループ学習の意義、指導形態、評価の在り方等についての議論。

9、10月：理論的研究及び実践研究。

11月以降：理論的研究及び実践研究のまとめ。原稿執筆。校正。発表（2月）。

Ⅲ 研究の内容

1 音楽の授業を活性化させるために

近年の高校生の音楽的関心は、ヘッドフォン・ステレオやCDラジカセ等の個人用オーディオ機器の普及とも相まって、非常に多様化、個別化してきている。また、ピアノや吹奏楽などの経験もかなり多様である。このような実情を抱えた音楽の授業においては、ある生徒にとって意欲をそそられる内容が、別の生徒にとっては興味を持たないというような状況が起こりがちである。

一方、最近、人と一緒に歌を歌ったり、合奏したりすることに無感動な生徒が増えているように感じられる。これは前述した音楽的趣味の個人化傾向に加えて、音楽を通して人間的な結びつきを深めていくような場が少なくなってきたことに関係があるだろう。今日、若者にとって音楽とは音響的な快楽を与えてくれる「モノ（商品）」に過ぎない存在に限りなく近づきつつある。それに反して、音楽によって人と人との結びつきを深めたり、アンサンブルにおいて演奏者がお互いの感性や気持ちを伝え合うといった、いわば音楽のコミュニケーション感覚を実感する機会はかなり減少しており、そのことが、授業においても、生徒が合唱や合奏の魅力に気づくのを妨げていると考えられる。

それらについて音楽の教師が取るべき方策は、一見矛盾を孕んでいるようにも思われる。と

いうのも、生徒の多様化に対しては、楽器や曲目の選択の余地を与えたり、能力差に応じて異なる課題を課すといった、授業内容の個別化を図ることが考えられるが、一方、音楽のコミュニケーション感覚の希薄化については、生徒たちがそのような感覚を音楽的共通体験の中で体験できるような授業構造を組み立てていく必要があるからである。

では、音楽の授業において、個人性と集団性をどう調和させていけばよいのだろうか。その問いへの一つの答えがグループ学習の導入である。一斉指導を中心とした授業では、生徒一人一人の感性の違いが生かされる事は少なく、教師対生徒の一元的関係は生徒同士の音楽的コミュニケーションの意識を低下させる。それに対して、グループ学習は生徒たちの個性的な感性を大事にしながら、さらにそれらを対峙させる場をつくる事によって、彼らの音楽的視野を広げ、同時に、彼らが音楽を人と人との関係のなかで捉える契機をもたらすのである。

2 グループ学習

(1) グループ学習の意義及び効果

グループ学習の意義とその導入が授業にもたらす効果としては、第一に、グループ学習は生徒一人一人の感性が発現される場を生み出すことが十分期待される。本来、音楽の表現や解釈は一義的なものではなく、様々な感じ方・受けとめ方があって当然であるが、一斉指導には生徒それぞれが持つユニークな感性を封じ込めてしまう傾向がある。グループ学習の導入によって、教師は子供たちの個性を引き出すことが望まれる。

第二に、グループ学習は生徒同士が音楽的感性を相互に伝えあう機会が生み出される。

第三に、生徒は自分たちの活動に責任を持たなければならないが、その自覚は学習に対する積極性をもたらす。

第四に、グループでの活動は必然的に互いに助け合う気持ちを引き出す。そして、学習のプロセスの中で、各人が他のメンバーの人格に触れ、また自らの存在を自覚することができる。

第五に、クラスの中に複数の集団が形成されることにより、集団相互の関係が生まれるが、この関係は、ある時は音楽の送り手と受け手の関係となり、またある時は良い意味での競争意識を育む関係となり、さらには自分たちの活動を相対化する視点を与えてくれる関係ともなりうる。

第六に、生徒の活動を援助する側に回った教師には、彼ら一人一人と直接触れ合う機会が生まれ、それぞれの個性や能力を把握したり、個人用にあドヴァイスをすることが可能になる。

以上のように、教師と生徒の一元的な関係を前提とした一斉授業とは異なり、グループ学習を導入した授業においては、多元的で濃密な学習空間が創出され、生徒の能動的な活動が行われることが期待できる。

(2) グループ学習の諸形態

音楽の授業ではどのような領域や形態でグループ学習が可能であろうか。

以下に5つの例を示す。

A. 生徒が自分たちで編成と曲目を決めるアンサンブル活動

生徒の自主性を最大限に生かした学習活動であり、通常は練習の成果を披露するため

の発表会が行われる。

生徒の意欲や潜在的能力を最大限に引き出し、実践的な音楽創造の中で表現する喜びをストレートに体験させることができるが、成功するか否かは、生徒の意欲に大きく左右される。

教師は、練習環境の整備や楽器の準備に十分に時間を割かなければならない。

B. 教師が編成と曲目を決めるアンサンブル活動

生徒の実情、音楽的な教育効果に加え、物理的な諸条件（練習場所、楽器、等）を念頭に置いた多様な題材設定が可能である。合唱のパート練習も広い意味でこの項目に含める事ができる。

生徒たちの自主的アンサンブル活動の予備段階に導入するのも効果的である。

C. グループによる創造的音楽づくり

いわゆる「創造的音楽づくり」の実践例の多くで、グループ学習が導入されている。

特に、図形楽譜等を用いた即興表現を伴う集団創作のような場合、単なる協力関係以上にメンバー同士が音楽的感性をすり合わせる必要に迫られ、そうした意味で最も密度の濃いグループ学習が行われる可能性がある。

また「音あそび」は、必ずしもグループ学習を前提としないものの、音楽のコミュニケーション感覚をわかりやすく感じとらせる効果的な学習活動である。

D. グループによる課題学習

鑑賞曲をグループで選曲して発表したり、教師が選んだ鑑賞曲の時代背景とか、音楽の関連テーマをグループで調査報告したりするような場合がこの項に該当する。選曲も自分たちで行うのであれば、互いの音楽的趣味について理解を深め合うことになる。

E. 鑑賞曲のグループ討論

音楽の聴き方の多様性を生徒たちに認識させ、また彼らの感受性の広げるきっかけとするため、鑑賞曲の解釈をディスカッションさせる場合に、意見を言いやすくなるようグループで討論させる、という方法が考えられる。

(3) グループ学習における指導の在り方

① グループ学習における教師の役割

グループ学習の際に教師がすべき事は一斉指導の際のそれとはかなり異なる面がある。

まず、教師の役割は生徒同士が「場」を育むような状況を「お膳立て」することにある。そこで彼らが自分たちで模索しながら発見していく過程が尊重されなければならない。教師は生徒の自主的な活動場面に性急に介入をするべきでなく、時には適切なヒントを与える事があっても、なるべく生徒自身による問題解決が行われるように配慮すべきである。

学習活動の計画性も重要である。ひとたび生徒たちの自主活動が始ると軌道修正が難しくなることもあるので、どういう事態が生じていくのか教師は事前に見通しをもっておくことが大切であり、予想外の場面についてはすみやかに対処する必要がある。また、活動期間が比較的長くなる場合、学習カードを活用したり、中間発表のような段階的な目標を設定したりすると効果的である。

グループ分けや選曲・編曲等の際には生徒の能力への配慮も必要となる場合がある。活動に際しては、特定の生徒の負担が過重になることのないように注意したい。

生徒たちが行き詰まった時には適切な助言を与えられるよう、あらかじめある程度その点を予想して準備しておきたい。選曲等に際し過去の発表の記録を参考にさせれば、無理な計画はある程度防げる。

グループ同士の協調（ないし競争）関係を作ることも有効である。例えば、練習の過程で聴き合わせてアドバイスをさせたり、表現の工夫がしやすい教材で各グループの独自性を発揮させたりする事が考えられる。

年間指導計画における位置付けには大いに注意が払われなければならない。なぜなら、グループ学習は、しばしば、いろんな意味において総合的な活動であるからである。あらかじめ音感の基礎訓練的なものや短期間・少人数で行えるグループ学習を実施しておけば、より高度な活動をスムーズに導入できる。

② 発表の場の工夫

発表の機会を与えれば多くの生徒たちは熱心に準備を行うはずである。その際、プログラムを印刷したり、担任も同席したり、録音や録画に行ったりする事で、彼らの緊張は高まり、発表会はより印象深く記憶に残るものとなろう。ただ、発表に際して生徒たちは自分の発表に頭が一杯になって、他のグループに無関心になってしまう事があるので、教師はお互いの発表を聴き合うことの大切さを彼らによく理解させるべきである。感想を書かせてそれを発表した側にフィードバックするようにすれば、発表会の雰囲気はさらに良くなる。

(4) グループ学習における評価のあり方

グループ学習をどういう意図で導入するのかによって、グループ学習の評価の対象や内容は異なってくる。

もし、グループ学習をあくまでも授業の活性化のための刺激剤に過ぎないものとして捉えるならば、評価の基準は一斉指導による場合と本質的には変わらない。

これに対し、グループ学習はそれ自体が目的であるという立場だと、一つの目標に向かって生徒たちが協力して音楽を作っていく過程での、様々な音楽的体験そのものが重要となり、その評価にあたっては、能力や知識の獲得達成度よりも、むしろ体験によってもたらされた生徒の内面の深化や音楽的な成長に重きが置かれることになる。したがって、テスト（発表会）のその場の結果だけではなく、活動の自主性や計画性といった様相から一人一人の音楽観の変化に至るまで、学習過程の様々な側面を視野に入れた総合的な観点から評価が行われるのが望ましい。

具体的な評価の手段としては、教師による音楽的評価は当然のこととして、生徒自らによる自己評価なども必要であり、その際、活動報告書が大いに有効となろう。また、学習カード等も客観性のある資料と見なすことができる。更に、教師が生徒たちのグループ活動の場に入り込み、音楽を創る過程に仲間として関われるのならば、彼らの音楽性や人間性は自ずと理解されるに違いない。

3 指導事例

事例1 「生き生きとしたリズムアンサンブルを味わうグループ学習」 音楽Ⅰ

1. 題材設定の理由

音楽好きな現代の高校生たちの中でも、音楽選択者は特にその傾向が強い生徒たちであろう。しかし授業で集まってくる全員に、主体的な学習態度が備わっているわけではない。個人の音楽能力の差が大きく、やや消極的、受動的な生徒が見られる。合唱の授業等では、読譜力の不足やリズム感がよくないこと、合わせるための基礎的な訓練の必要性などを感じている。音楽を表現する喜びを、身近な仲間たちで味わっている者も少ないようである。

ここでは、グループ学習の長所を生かし、生徒が興味をもち、意欲的に学習できる題材として、リズムアンサンブルを取り上げた。リズムという音楽の重要な要素を素材とするリズムアンサンブルは、比較的实践しやすい。1人1人が自分の役割を果たしながら、グループで協力し1つのものを完成していく中で、活気あるアンサンブルが体験できるであろう。また、よいアンサンブルを実現させるためには、読譜力、リズム感、表現力などの能力の育成や、合わせる技術の習得が、不可欠である。

本事例では、グループで「いきいきとしたアンサンブルを楽しむ」ことを根底にしているが、発表の場への目標をもった練習過程の中で、音楽の基礎的・基本的な能力を向上させることも可能となるであろう。また、変化を工夫したり、リズム・アンサンブルを創作したりして、個性的・創造的な学習活動が展開できるなどの発展性も期待できる。

2. 指導目標

- (1)グループ内での自分の役割を把握させ、いきいきとしたリズムアンサンブルの楽しさを主体性をもって味わわせる。
- (2)身体を使った、多様な音色やリズムを工夫させる。
- (3)読譜力、記譜力、リズム感、表現する力など、基礎的・基本的な能力を向上させる。
- (4)発表の場を体験したり他グループの成果を聴き合ったりすることによって、学習活動をより活性化させる。

3. 指導計画（10時間）

第1次

- ・導入 リズムを強調した音楽の鑑賞
インドネシア、バリ島「ケチャ」の映像、S・ライヒ「Clapping Music」
- ・ボイスリズム 「野菜の気持ち」 古谷哲也作曲
 - ①全員で全5パートを練習。次に列ごとにパートに分かれ、全員で合わせる。
 - ②5人ずつのグループに分かれ、パートを決め、練習。
 - ③グループごとに1フレーズを受け持ち、順次続けて演奏する。
 - ④言葉を変えて、同様に演奏。

第2次（3時間）

- ・「ロック・トラップ」（譜例1）

①全員で、全4パートの練習。次に列ごとなどパートを決め、全員で合奏。各自が4パートすべてを受け持つよう、交代して行なう。

②任意に組んだ4人ずつのグループで、リーダー、パートを決め、練習する。

・「打楽器のためのプレリュード」を同様に実践する。(譜例2)

第3次(3時間)

- ・1曲を選び、アンサンブルをまとめる。
- ・「スーパー・パーカッション」(打楽器奏者の競演、ライブの映像)の鑑賞。
- ・リズムアンサンブルを創作。記譜し、演奏する。リズム譜は提出。

第4次(2時間)

- ・グループごとに発表。最初に自分たちが創った、短いリズムアンサンブル。次に、3曲から1曲を演奏する。
- ・聴き手は、意見、感想等を記録する。
- ・グループごとに自己評価し、反省点等を話し合う。

譜例1

ROCK TRAP ③ By William J. Scott

♩ = 120

1. 2. 3. 4.

tap R. knee
tap L. thigh

Clap fingers into palm

mf

譜例2

打楽器のためのプレリュード

Allegretto-Frullo

1. 2. 3. 4.

1. 2. 3. 4.

1. 2. 3. 4.

4. 学習指導の展開

第3次(3時間)

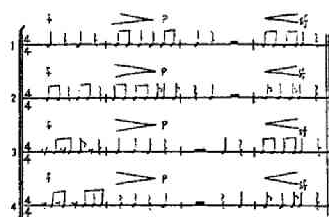
◆ 評価の観点

指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点
・曲の決定 ・個人練習 ・パート練習	・任意の4人グループで、3曲を比較し、発表する曲を決める。 ・各自のパートを、楽譜を正確に読み取り、打てるようにする。 ・同パートの者が集まり、正しく演奏できているかをお互いに確認する。	・スコアを比べさせ、表現法、演奏効果を考えさせる。 ・たたき方による音色の変化に気づかせる。 ・歯切れのよい、リズム感のある演奏をめざさせる。
◆楽譜を正確に読み取り、リズム・テンポ・強弱に配慮して打っているか。		
・4人でのアンサンブル	・4人で合わせる。一定のテンポを保ちながら、最後まで通せるようにする。 ・遅めのテンポからだんだん速くしていく。	・出だしのタイミング、テンポの合わせ方等を助言する。

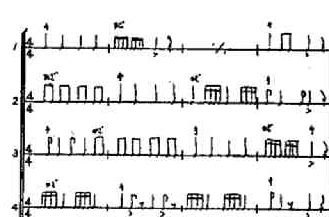
	・曲の構成を考え、かけ合い等の表現を工夫する。 ・フレーズ内での重要なパートを知り、バランスを考える。 ・グループで音色、強弱のつけ方、活気あるリズム感の出し方を工夫する。	・全グループを平等にまわるようにする。 ・スコアの読み方を教える。 ・合わないグループではその理由に気づかせる。
◆ $\frac{4}{4}$ 拍子に合っているか。全体の中での自分のパートの役割を、意識して演奏しているか。		
・鑑賞 ・リズムアンサンブルのグループ創作	・「スーパー・パーカッション」(LD)を鑑賞する。 ・打楽器の表現力の大きさを知る。 ・グループごとに、4小節(または8小節)、4パートのリズムアンサンブルを創作する。 ・4パートに関連をもたせるようにする。テンポ、強弱、リズムの種類、音源、音色に工夫する。 ・各自が全パートを記譜し、提出する。	・合わせ方、リズム感等に注目させる。 ・音色の工夫の見本を示す。 ・リズム譜の書き方に注意させる。
◆ 1人1人が積極的にかかわっているか。発表の効果を考えて創っているか。		
・発表に向けての練習	・創作したリズムと発表曲の練習をする。 ・各曲で指定部分の反復時に変化をつける。	・構成を考えた曲想、変化、終止感等を工夫させる。
◆ よりよい発表のために、グループの全員が意欲的か。アンサンブルを楽しんでいるか。		

生徒が
創作した
リズム

①



②



5. 考察

グループ学習の最初から、生徒たちの取り組みは熱心で、教室は活気にあふれた。教え合う姿が随所に見られ、全体学習では消極的だった生徒も、自ら仲間や教師に何度も質問していた。グループを巡るたびに一人一人の顔や個性がよりはっきり見えてきた。生徒の感想では、「4人になると全然合わなくて困ったが、合ってくるとおもしろくなり、いい気持ちだった」というものが多く、最後まで合わせられると、小躍りして喚声を上げる姿も見られた。創作および変化のさせ方では、どのグループも真剣に集中してアイディアを出し合っていたが、より創造的な学習活動のためには、課題の設定のしかた、導入時の指導に、更に配慮が必要であろう。自分たちの音がよく聞こえる練習場所を捜しつつ、楽器の使用、音源の工夫なども取り入れると更に改善され则认为。発表では各グループの練習の成果が端的に表われ、生徒たちは発表の場を楽しみ、興味をもって聞き合っていた。評価に関しては、発表時のグループごとの評価を基に、発表時の個人の演奏、練習の各段階での意欲、貢献のようす、提出プリント等を参考に総合的に行なった。

生徒の主体性を尊重しつつ、充実感の高い学習活動が展開できるよう、適切な助言、練習段階での他のグループとの聞き合わせ、達成度の確認等を工夫し、このグループ学習を更に深めていく必要がある。

事例2 「グループ学習を取り入れた合唱活動」 音楽Ⅰ

1. 題材設定理由

高校生の授業での合唱活動に、最近いくつかの問題点を感じている。その一つはパート練習において音楽的または人間的にリーダーとなれる生徒が少なくなり（特に男子）効果的な練習を行なうことが難しくなっているということである。また、パート練習自体が同パートの集まりのためか、いざ合唱という段になると他のパートにつられたり、ハーモニーやバランスを聴きあうという姿勢に欠けている。

あふれる音楽情報の中で生活し、多くの生徒たちは音楽を聴く楽しさや歌うことの楽しさなどを味わっている。更にそれを深めていくことは学校教育の使命の一つである。また、合唱は授業において重要な活動の一つであり、皆で一つの曲を創り上げ表現していくという行為は貴重な音楽体験である。

そこで本事例では上記のようなことを踏まえ、合唱活動を活性化させるためにグループ学習を取り入れた。

なお教材については、選曲から生徒自身にさせたいところだが、今回の取り組みではあくまでも合唱活動を活性化させるためにグループ学習を取り入れたので、年間の授業計画の流れに沿う形で教師が指定した。

2. 指導目標

- (1) 生徒と教師あるいは生徒相互のコミュニケーションを大切にし、生徒一人一人に意欲的に合唱に取り組ませる。
- (2) 音程、リズム、歌詞、強弱記号や発想標語などを正しく把握し表現させるとともに、グループでの表現の工夫をさせ、お互いのハーモニーやバランスを聴き合い、アンサンブルの楽しさや、美しさを味わわせる。
- (3) 他のグループの演奏を聴き、より美しい表現を求める姿勢を育てる。
- (4) グループ学習をもとに更に全体での合唱の楽しさ、美しさを味わわせる。

3. 指導計画（9時間扱い）

第1次（1時間）の指導内容

・教材曲への動機づけとグループ編成

- ①教材曲 混声3部合唱曲「名づけられた葉」（新川和江作詞、飯沼信義作曲）の楽譜を配布し、テープ演奏（中学生のコンクールのもの）を聴かせる。
- ②グループ学習の実施に関して説明し、各パート2人計8人のグループを自分たちで作らせる。（条件はピアノなどの楽器を弾ける人がグループに1人はいるようにすること）。リーダーを決め、その後グループが横1列に並ぶように着席させる。

第2次（2時間）の指導内容

- ・全体による音取りとパート練習を織り混ぜながら行なう。その際も、グループ学習を意識させ、自分のパートに責任を持つように促す。正しい音程、リズム、歌詞、強弱記号、発

第3次（2時間）の指導内容

①自分たちで協力しあって練習を進めさせる。

③各グループなりの表現のポイントを考え、それを表現できるように練習させる。

④毎回のグループ毎の進度を進度表に記入させる。……表1

・グループによる中間発表

自分たちのこれまでの成果を発表し、ここまでの取り組みを確認させる。また、他のグループの演奏を聴くことにより、自分たちの演奏の参考とさせる。評価カードに記入させる。

・グループ練習

前回の中間発表をもとに、自分たちのグループの反省点を話し合い、ポイントを確認して次回の本発表にむけて練習させる。

・グループによる本発表と合唱

①グループによる本発表。これまでの取り組み方をも含めた自己評価をし、他のグループについても感想を書き、提出させる。

②これまでのグループ学習をもとに更に全体での表現を統一し、合唱する。録音し、1学期に自分たちが歌った合唱曲「遠い日の歌」のテープと聴き比べをさせる。

グループ名 []

メンバー氏名	S	A	T	B
--------	---	---	---	---

この曲のポイント

- 1 正確な音程、リズムで美しいハーモニーを作ろう。
* 細かい音の動きでの歌詞や音程に気をつけよう。
- 2 歌詞を大切にし、それにあった表現を自分たちで工夫しよう。
- 3 バランスを考えたコーラスにしよう。
* メロディーと他のパートとのバランスに気をつけよう。

自分たちのグループのこの曲での課題

進度數

	日 時	本時に行なったこと	記録者	確認
1	／ ()	グループ練習		
2	／ ()	グループ練習		
3	／ ()	中間発表		
4	／ ()	グループ練習		
5	／ ()	テスト		

中間発表風景



4. 学習指導の展開

第3次(第1次)

◆ 評価の観点

指導内容	活動内容	指導上の留意点
- 発声練習 - 教材曲(名づけられた葉)の合唱	- 軽く準備体操をし、発声練習をする。 - これまでのパートによる音取りを基に合唱してみる。	- 身体をリラックスさせ、歌うことに集中させていく。 - 本時からグループ学習に入ることを言いそれを意識して歌わせる。全体の中でどのくらい歌えるか確認させる。
◆歌うことへの動機付けができたか。どのくらい歌えているかを個人が確認できたか。		
- グループ学習への導入 - グループ練習	- 第1時に決めたリーダーを中心に各グループで指定された場所に集まり、自分たちのグループの課題を話し合う。 「他のパートを聞いてきれいなハーモニーを作る。」「強弱に気をつける。」などが挙げられた。 - ピアノまたはテープを使ったグループ毎に練習する。まず正しい演奏を、次第に課題の追及を目指す。	- きちんと全員が話し合いに参加しているか。体制作りを助ける。 - 生徒の自発性を尊重しながらも、できるだけグループの中へ入り、グループや個人を観察をし必要な場面では公平にアドバイスをする。
◆意欲的、協力的にグループ学習を進めているか。お互いを聞きあい、表現を追及しているか。		
- 合唱 - 本時の反省と次時の予告	- グループ毎のままクラス全体で合唱する。 - グループで本時の活動の反省をし、進捗表に記入、提出する。	- 気付いたところをチェックしながら歌わせる。 - 活動および進捗の反省をし、次時への目的意識を持たせる。

5. 考察

グループ学習をしている間、教室には非常に活気があった。初めのうちは必ずしも全員が音楽に集中できたわけではなく、活発な活動になるまでに思ったより時間がかかるグループもあったり、リーダーだけに負担がかかってしまったりしたところもあった。しかし回を重ねるうちにグループに生徒も慣れ、少しずつスムーズに機能していったようである。そのうちリーダーを中心として教えあう姿も見られ、生徒は意欲的で楽しそうだった。また、教師自身もグループの中を細かく見て回ることにより、思わぬ生徒の個性や力を発見でき、個人への指導もいつもより可能となった。グループ学習は、総じて意欲を引き出すという点においては有効だった。ただ生徒だけで創り上げようとする内容には限界を感じたことも事実であり、グループ学習後の全体合唱では、やはり時間をかけて指導する必要があった。それにしてもグループでの基礎があったのでその浸透度はいつもより充実していたように思うし、歌うことの喜びが増し、合唱に勢いが出てきて、他パートを聴こうとする姿勢も見えてきた。また途中で行なった中間発表は非常に有効であった。普段一斉に教室で5つのグループが練習しているため、この機会に静かな中で緊張感を持って発表することは自分たちの完成度を知らうえでとても参考になったようであり、ほとんどのグループが本発表では中間発表よりも良い演奏となった。グループ発表での評価については、グループ単位での評価を中心に行なった。その上で見て回った際の個人の様子や自己評価カードに記された本人の感想を加味した。

今後もこのグループ学習が系統的に様々な形で積み重ねられることによりグループ学習の効果は更に高まるものと考ええる。

指導事例3 「自分の得意な演奏手段で楽しく合奏しよう」 音楽I

—— 課題曲の任意楽器（人声含む）によるアンサンブル ——

1. 題材設定の理由

演奏技術や音楽的理解の面で、これまで基礎力が十分とはいえなかった生徒にとって、曲を演奏し遂げるということは、過去の経験から相当な苦労を強いられるものと感じているようである。苦労を重ね、努力をして為し得た時の感激というものはひとしおなのだが、音楽でそのような体験が不足している生徒は、苦労によって得られる音楽の「楽しさ」を願いながら、苦労の果てに学習途上で放棄してしまう傾向がある。中には、学習の初めから意欲を示せず、着手しようとしないう傾向がある。このことは、生徒の積極的な参加を望み、生徒自身の力による作品の完成が彼らの達成感、自信、感動の源泉であると考えている教師にとって大変重要な課題である。その解決策として、生徒自身の力による作品の完成を目指し、音楽作りに参加する「楽しさ」を確保し、作品完成に必要な生徒の学習内容の適切な設定をすることが大切である。

ここでは平易な楽曲を素材とし、自分の最も得意とする演奏手段を選んで楽しく学習をすすめることにした。アンサンブル（グループ合奏）という形態をとったのは、①生徒の参加意識を高め、活動を増やせること、②友人との共同作業をすすめる中で「楽しさ」を味わうことができ、意見の交換などの交流も生まれること、③生徒個々の活動の様子をつぶさに観察できる上に、個人発表の際に存在する個人にかかる心理的負担を軽減できること、④一斉指導の課題を解消できること、などが達成できると考えたからである。

2. 指導目標

- (1) 演奏者全員が途中で演奏をやめてしまうことなく、最後まで演奏し遂げるようにさせる。
- (2) 任意のテンポで構わないが、最初から最後まで一定のテンポで演奏できるようにさせる。
- (3) グループ内での自分の役割、自分の演奏する音の意味を認識させる。
- (4) 演奏に対する工夫をさせる。
- (5) みんなで合奏することの喜び、楽しさを経験させる。

3. 年間の指導の流れ

I 学期 （全12～14時間）

『少年時代』を教材に学習をすすめる。

- | | | |
|---|------------------------|-----------|
| { | 予備学習（楽典に関すること、音名ふりの作業） | （2時間相当） |
| | ①歌唱 —— 旋律 | （2時間相当） |
| | ②キーボード —— 旋律 | （3～4時間相当） |
| | ③ソプラノ・リコーダー —— 対旋律 | （2時間相当） |
| | ④ギター —— 和音（リズム・パターン任意） | （3～4時間相当） |

①～④を生徒全員が共通に学習する。それぞれについては一斉指導と机間巡視による個別指導の場面がある。①～④の中より実技試験では2つを選択する。

II 学期 （全7～9時間）

I 学期に学習した『少年時代』を課題曲にアンサンブル（グループ合奏）を行う。

（全 5 時間）⇒ 本事例

- ・使用楽器は《約束》に反しない限り何でも可
- ・I 学期に学習した①～④の楽器がパートを考える上での基礎となる

自由曲の合奏 （2～4 時間）



III 学期

自由曲の合奏 （5～7 時間）

4. 指導計画（全 5 時間）

〈第 1 時〉

- ・グループ合奏の説明をする。
- ・合奏例の鑑賞及びイメージづくり。
- ・グループ編成をさせる。
- ・パートを決めさせる。
- ・バンド名を決めさせる。
- ・バンド・リーダーを決めさせる。
- ・個人練習をさせる。

〈第 2 時〉～〈第 4 時〉

- ・個人練習をさせる。
- ・合奏の練習をさせる。

〈第 5 時〉

- ・発表会、録画を行う。
- ・他のグループの発表について、お互いに感想、意見などを審査用紙に書かせる。
- ・発表終了後、録画したビデオの鑑賞をさせる。特に自分の演奏、自分達のグループの演奏に注目させる。

《約束》

1. 音楽の授業をとっている者全員がどこかのグループに参加すること。
2. グループ合奏（バンド）のメンバーの人数は 3 人～6 人。1 人っきりや 2 人だけにはならないこと。
3. 打楽器は各グループ 1 人だけ。打楽器アンサンブルのような特殊な例は別途相談。
4. 同じ楽器（歌も含む）を演奏する者が 2 人以上いてはいけない。ただし同じ楽器であっても、同一の動きでなければ可。（1 人 1 人が必ず独立した 1 パートを担当するようにする）

例）メンバー 4 人のうち 2 人が同じメロディーを歌うことは不可
例）メンバー 4 人のうち 2 人が二重唱（デュエット）することは可

5. 楽器編成は自由。ただし、メロディーパートと、それを支えるハーモニーを感じさせるパート（ベース音、コードなど）は必ず作ること。
 - ・音楽室にある楽器（ドラムセット、エレキベース、シンセサイザー、キーボード、アコースティックギター、トランペットなどの吹奏楽楽器、鉄琴、木琴など）
 - ・音楽室にない楽器は自分達で調達すること
6. グループ合奏の発表を必ず行うこと。

5. 学習指導の展開

〈第 1 時〉

◆ 評価の観点

指 導 内 容	学 習 活 動	指導上の留意点
グループ合奏の説明		《約束》の書かれたプリント配布
合奏例を鑑賞	おおまかなイメージをつかむ	演奏者全員が一曲を最後まで弾き通すことを指示
グループ編成		
◆参加への意識は高まったか。		
パートの決定		使用楽器は何でも可

◆楽器への興味は持てたか		
バンド名の決定 バンド・リーダーの決定 個人練習	最終的に決まったことを登録用紙に記入する。 既に学習した楽器と音の動きそのままの者は復習。それ以外の者は個別に練習する。	設定（譜例参照）外の楽器、音の動きなどを望む生徒については、個別に相談の上、別途楽譜を作成し指導する。
〈第3時〉		
準備 合奏の練習	合奏の準備をする。 バンド・リーダーを中心に合奏する。	ほとんどのグループで生徒が合奏状態を作り出すことができないため、教師の補助を必要とする。
◆積極的に活動しているか		
	お互いの音をよく聴いて曲のワク組みを構築する。	ワク組みが見えてくると、各役割を意識させられる。
◆曲のワク組みが作れたか。できた時の手ごたえを感じているか。		
必要に応じて個別指導	必要に応じて、個人練習と合奏とを繰り返す。	
◆アンサンブルを楽しんでいるか。演奏で生じた不都合を解決しようとするか。		

6. 考察

I学期に、歌唱、キーボード、ソプラノ、リコーダー、ギターの4種については全生徒に基本的な学習を取り組ませておいた。本事例はこれを基にしたものであるが、合奏を行う際生じる楽器の競合や、打楽器の安易な選択を回避するために《約束》なるものを定めた。しかし、楽器を固定せず、任意の楽器で参加できることにより生徒の学習意欲は高まる。楽器持参で授業に来る者もみられた。これに伴い、様々な楽器に対応できるよう基本的なパターンを設定し、それでも対応が難しい場合には個別に考えた。読譜の場合では、色分け音名譜、タブ譜、音型譜で指導をした生徒も多い。演奏場面では、楽器本体へのマーキングも行った。このように、技術的、精神的苦勞からくる生徒の意欲喪失が起らないよう、困難さを極力排助する方向で指導した。

音楽的にリーダーシップをとれる生徒がいなかったため、完全な生徒主導には遠く、また音楽的向上のための高い意欲や技術の獲得、独創的な工夫は少ない。しかし、一番の目的である「ただ一人の脱落者もなく、生徒自身の力により楽曲を演奏し遂げること」と、それによる達成感を与えることができた。音楽とは「ただ何となく聞く」だけの存在から、主体的に参加して「楽しさ」を得ることのできるものであるという認識を深めることができた。

事例4 「バリ・ガムランによるアンサンブル感覚の育成」 音楽Ⅱ

—— オーラル・コミュニケーションによるグループ学習の方法を用いて ——

1. 題材設定理由

本校の音楽選択者の多くはピアノや吹奏楽などの音楽経験があり、読譜能力も高い。学校行事として合唱祭を50年近くも続けていて、混声4部合唱の授業でも男声のパート練習が比較的容易に行える。しかし近年、一緒に歌った時にお互いの音を聴きあってハーモニーを楽しむ感覚が薄れてきているような印象を受ける。一人一人はそれなりに音がとれていても、合わせることの醍醐味が分からなくなっているようである。

また毎年、2学年の3学期に、高校の音楽授業の締めくくりとして生徒の自由な楽器選択と選曲によるグループ演奏発表会を実施しているが、やはり総じて互いの音を聴き合う意識が不足していて、リズム感やアンサンブルの水準が低い。どうも、それまでの2年間の音楽の授業で教えている事がグループ発表の質的向上には必ずしも役立ってはいないようである。

そこで、2年3学期の演奏発表会へのエクササイズとして、2学期にインドネシア・バリ島のガムランの実習を導入することにした。なお、教師はバリ島ガムランの演奏グループの活動の経験であり、その演奏には心得があった。楽器はガムラン・アンクルンのフル・セットを用意する事ができた。

ガムランとは言うまでもなくインドネシアの金属打楽器を中心とした合奏音楽である。バリ島のガムラン音楽はミニマル・ミュージックによくみられるモアレのようなリズム・テクスチャと反復性を特徴とする。バリ島のガムランにはその用途に応じて様々な種類のものがあるが、今回授業に導入したガムラン・アンクルは4つの青銅の鍵盤をもつ比較的小型の鉄琴類（ガンサ）を中心に構成され、6～8名から20名程度で演奏可能で、主として葬式や寺院の儀式などで演奏される。その音楽はシンプルなものが多く、初心者には適していると言える。

バリ・ガムランの演奏に際して、奏者たちは互いの音を良く聴きあって合奏を作っていくなければならない。特に「コテカン」という独特の技法では、「ボロス」と「サンシ」という2つのパートがうまくシンクロナイズして演奏されないと、それらが組合わさってできる細かなリズムの装飾音型が浮かび上がってこないのである。またガムランの合奏で用いられる様々な楽器が奏する音型は相互に密接な関連性があり、その関係は耳からの把握が比較的しやすい。加えて、パターンの移行、強弱や速度の変化などのきっかけは、太鼓（クンダン）奏者が音で合図するので、演奏者には互いの音を聴きあう感覚が必要となる。また、バリのガムランは宗教的な儀式に深く関わっているとはいえ、アマチュアが演奏それ自体を楽しむ側面も持っていて、高度な音楽性や能力が要求される楽器から比較的簡単に演奏できる楽器まで含まれており（しかも簡単な楽器ほど存在感がある）、初心者でも短期間で合奏に加われるのである。

そこで、このようなバリ・ガムランのエッセンスを有する短い曲を教材にすれば、初めてガムランに接する高校生たちであっても十分演奏可能であり、互いの音を聴きながら演奏するトレーニングとリズム感の向上には最適であると考えた。

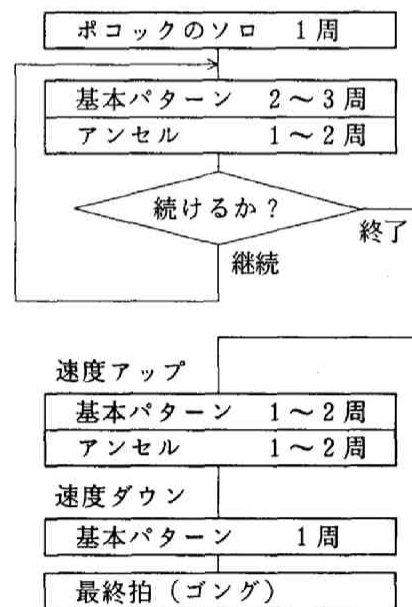
2. 指導の目標と方針

- (1)互いの音を聴き合って、リズム、音量、音色等を自然に合わせる感覚を養いながら、リズム感を向上させ、バリ島の音楽の特質を感覚的に理解させる。具体的には、
 - ・比較的簡単で短い楽曲「ギラ・カユマス」を各グループそれぞれが通して演奏できるようにする(楽譜1)。
 - ・曲の核となる旋律「ポコック」とバリガムランに特徴的な装飾音型「コテカン」のパートは全員に習得させる。
 - ・太鼓「クندگان」の合図を聴き取って、ブレイク・パターン「アンセル」(強弱・音型の変化パターン)に入ったり、演奏速度を変えたりできるようにする。
- (2)バリ島で行われている学習法をとり入れ、楽譜を使わずに口頭で直接フレーズを伝えていく、いわゆるオーラル・コミュニケーションにより曲を教える。
 - ・現地で用いられている口唱歌を積極的に利用する(楽譜2)。
 - ・記憶した音型を方眼紙のような特殊な図表に記譜させることにより(表1)、生徒の音楽構造理解の助けとし、同時に教師が生徒の習得状況を把握するための参考とする。
- (3)グループ学習を指導形態の基本におく(1グループ6～8人程度)。
 - ・授業の進行にあたっては生徒の自主性・協調性の向上に留意する。
 - ・「進捗確認表」(表2)を利用して、学習の進行状況を掌握する。

楽譜1 Gilak Kayumas の基本パターン

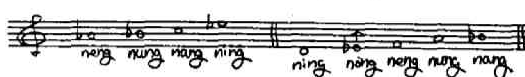


図1 ギラ・カユマス演奏の流れ図



楽譜2

slendro 音階の例 pelog 音階の例



☆「アンセル」では基本パターンをより大きな音量で演奏し、途中でブレイクする。ラングが音量を大きくすることで、アンセルの合図となる。

☆速度変化の際は、ゴングの直前にラングが次のテンポを示す音を挿入する。

第1次（2時間）

- ①バリ・ガムランの演奏ビデオ鑑賞（ゴング・クビヤル「スカール・ジュブン」）。バリ島の文化・宗教・芸能についても言及。
- ②ガムランの中心楽器「ガンサ」（鉄琴）の基本奏法（右手に持った木製のハンマー「パングル」で鍵盤をたたき、次の鍵盤をたたくのと同時に左手で直前に打った鍵盤をつかんで残響を止める）を説明し、全員に順番で触らせる。
- ③ガムランの実習を行う事を告げて、教材曲（ギラ・カユマス）のビデオを鑑賞。
- ④ギラ・カユマスの「ポコック」（核旋律）と「ゴング」のパートを全員に交替で弾かせる。
- ⑤生徒にグループを組ませ、グループ名を決めさせる（④と並行）。グループ名はバリ島に関連した語から選ばせる（参考資料を用意）。

第2次（2時間）

- ①NHK教育「インド飛翔の響き」（北インドのサントゥールとタブラ）のビデオ鑑賞。特にタブラの口唱歌の解説・実演に注目させる。
- ②バリ島の音階と口唱歌について説明し（楽譜2）、ポコックを口唱歌で歌わせる。
- ③ポコックとゴングのグループ別練習。進度確認表（表1）を利用する（以後、同様）。各グループで最初に確実に演奏できるようになった生徒は、進度チェック表に教師から合格チェックをもらう。教師から合格チェックを受けた生徒はグループの他の生徒の合格チェックをする事ができる。教師が生徒に直接指導する際、ガンサの反対側から一緒に弾くと効果的である（この方法により、1台のガンサを2人の生徒で同時に弾く事も出来る）。
- ④ポコックとゴングの習得を概ね完了したグループに、コテカンの2つの音型のうちの1つ「ボロス」を順次教える（方法は③と同様）。ボロスはポコックと一緒に弾きながら教えることに留意（以下、他のパートも同様）。口唱歌を併用。

第3次（2時間）

- ①全員のボロスを口唱歌で歌わせてから、グループ別練習。確実に弾ける生徒がでたらコテカンのもう一方の音型「サンシ」を教師が同時に弾いて、リズムが合うかどうか確認する（ボロスはポコックの拍の位置と関連づけて覚えるよう留意させる）。
- ②ボロスの習得がある程度進んだ頃を見計らって、全員にコテカンの上側の音型「サンシ」を口唱歌で歌わせ、コテカンの仕組みについて説明する（サンシもポコックの拍の位置と関連づけて覚えるよう留意させる）。ボロスとサンシ（及びコテカン）のグループ別練習。

第4次（2時間）

- ①全員で口唱歌によるボロスとサンシの練習。
- ②「パート・チェックシート」（表1）を配布し、各自が覚えた音型を口唱歌で書き込むよう指示する（本次の最後に回収）。インドネシア独特の拍の感じ方を尊重して強拍が最後にくるように書いてあることを説明し、このシートを見ながら演奏してはいけないこと（音型を忘れそうになった時の確認に使うのは可）を注意する。
- ③ボロス、サンシ（コテカン）のグループ別練習。
- ④全員に「ジェゴガン」（低音鉄琴）の音型を範奏する。
- ⑤全員に2種のクندگان（太鼓）、「ラナン」「ワドン」の演奏法とその口唱歌（普通に打つ時は「pa（ラナン）」「ka（ワドン）」皮を左手でミュートしながら打つ時は「dung（ラナン）」「dang（ワドン）」）を説明し、それぞれの音型を範奏する。
- ⑥グループごとにパート分担を決定。

第5次（2時間）

- ①ジェゴガンの奏者に音型を教える。
- ②ラナン、ワドンの奏者に口唱歌を利用して各パートを教える（習った音型を後でパート・チェックシートに記入しておくよう指示）。
- ③クندگانは個人練習と合わせ練習、それ以外はグループ別練習。

第6次（2時間）

- ①「ボロス+サンシ」（クندگان以外全員）または「ラナン+ワドン」（クندگان）のテスト。

第7次（2時間）

- ①ケチャのパターン例（芸能山城組）と現地のケチャを鑑賞。音量やパターンの変化を音で合図している事に留意させる。
- ②基本パターンの合奏練習（グループ毎に交替で行う。以下同様）。
- ③アンセル（音量と音型の変化パターン）の説明と合奏練習。
- ④基本パターンとアンセルを組合せて合奏練習。最初は基本パターンとアンセルの回数をあらかじめ決めておいて練習し、うまくいったらラナンの合図に反応して即興的にアンセルに入れるようにする。

**第8次（2時間）**

- ①曲の構成の流れ図（図1）を配布・説明し、範奏ビデオの鑑賞。繰り返しの回数はラナンが即興的に合図を出して決まることを確認。
- ②速度の変化を伴う合奏練習。ラナンの合図でテンポを速くしたり遅くしたりできるようにする。
- ③NHK沖縄「バリ島に鳥歌の原風景をみた」（バリの人々の生活と音楽の結びつきを沖縄の人々のそれと結び付けたルポ）のビデオ鑑賞——②と③はグループを2組に分けて並行して行う。

第9次（2時間）

- ①合奏練習のまとめ。 ②グループごとに発表。 ③発表報告書の提出。

事例5 「2時間で仕上げるリコーダーとギターの重奏・合奏」 音楽I

1. 題材設定理由

数週間にわたって系統性の高い授業を行おうとするとき、問題となるのが欠席者への対応である。特にグループ学習を行うときには、その第1週に出席した生徒が第2週に欠席しても、逆に第1週に欠席した生徒が第2週に出席しても、最初からグループ組み直して、はじめから学習する必要性が生じる。このために、これまでグループ学習を実施してこなかった。

しかし、グループ学習でしか得られない、力を合わせてひとつのものを作り上げる喜びを経験させることは大切なことである。そこで、前述の問題点を克服するために教材に工夫を加え、2時間続きの授業1回で仕上げられるようにしたのが、この指導事例である。

2. 指導目標

合奏と、その練習となるパート練習、重奏練習を通して、アンサンブルをする楽しさを知る。

3. 指導計画（2時間扱い）

事前にリコーダー及びギターの奏法について、よく習得させておく。

第1次（1時間）の指導内容

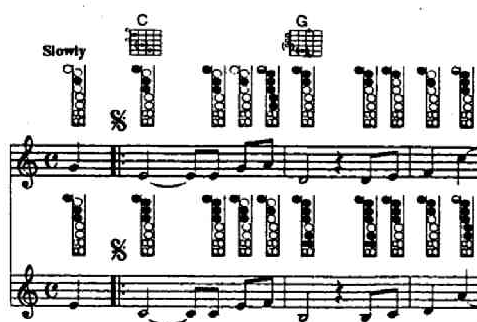
- ・教材の提示・説明
- ・グループ分け
- ・パート決定
- ・パート練習

第2次（1時間）の指導内容

- ・重奏練習
- ・発表
- ・合奏

譜例

Hey Jude



4. 学習指導の展開

◆ 評価の観点

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
＜第1次＞ 教材の提示・説明 「Hey Jude」		・学習の負担を減らすため、教材の楽譜には楽器の指使いを印刷しておく（譜例）。 ・現在まで学習した技術の範囲内で演奏できるものであることを説明する。 ・ひとつのグループの人数がパート数以上となるように作らせる。
グループ分け	グループに分かれる。	
パート決定	グループの中で自分の演奏したい楽器、パートを話し合わせ、パートを決定する。	

パート練習	パート毎に別れてパート練習をする。	パート練習が終わったら、それぞれのパートを音を全員で確認する。
<第2次> 重奏練習	◆自主的に積極的に活動しているか。正確に、また音楽的に演奏しているか。アンサンブルしているか。	
	再びグループに分かれ、重奏の練習をする。	練習にあたってはなるべく生徒同士の自主的な教え合い、助け合いを尊重する。
発表	◆自主的に積極的に活動しているか。互いに助け合っているか。互いの音を良く聞きあっているか。	
	各グループの練習の成果を発表する。	状況によっては、一部のグループだけに発表させる。
合奏	◆のびのびと演奏できたか。	
	合奏をする。	重奏と合奏での音色の違い、表現力の違いなどに注意させる。
	◆よく全体の音を聞いて演奏しているか。	

5. 指導に対する考察

授業の選択の関係で、ほとんど授業以外では顔を合わせない生徒同士が、どうやってグループを組み、活動してゆくかがまず大きなポイントであった。

グループ分けでは生徒の自主性を尊重したが、ほとんどはたまたま席が近い者同士（席は自由だが、毎週だいたい決まった席に座る）がグループを組んでいた。次のパート練習の段階では、強力なリーダーシップをとれる生徒がいたパートを除いては、リーダーが自分が何をしようかわからず、とりあえず個人練習をして過ごすということが時々見られた。しかしそれでも始めて30分くらいで、何とかパートとしてのまとまりが見られるようになっていった。

グループ練習でも、その傾向は同じであった。しかし、この中で印象的だったのは、普段の授業にはあまり関心を見せないある男子生徒が、授業の展開につれ授業に熱中し、今まで見せたことのないような笑顔で楽しそうに活動していたことである。

また、2時間という時間であるが、やはりこれでは時間が足りないという印象を受けた。グループがグループとしてまとまるまでに30分近くかかり、この時間設定ではやっとグループ活動らしい練習が始まった段階で終わりということになってしまう。内容を洗練すること、また、生徒自身がグループ活動に慣れることが必要であると感じた。グループ学習に限らず、系統性の高い授業で、いかに楽しい学習を成立させるかを今後の課題としていきたい。

事例6 「現代音楽的な音空間の中でグループ即興演奏を楽しむ」 音楽Ⅰ

1. 題材設定理由

生徒は自分を自由に、心の底から、音で表現することの喜びを味わいたいという願いをもっている。しかし、必ずしも生徒は楽器を自由に操作することができる技術を持ち合わせているわけではない。一方、音を出すことを恥ずかしがりがちである。

そこで、楽器の技術にとらわれずにすむような音空間と、望ましい雰囲気の中で、自由に（音楽的なルールにとらわれない）音を発することができるようにと考えたのが、この題材である。

2. 指導目標

- ・まねでない、自分の表現をすることができるようになる。
- ・互いに聞き合い、音の上での対話をすることができるようになる。
- ・即興演奏や現代音楽が、決して秩序のないものではないということを理解する。

3. 指導計画（4.5時間扱い）

第1次（0.5時間）の指導内容

- ・題材の提示，説明
- ・使用する楽器についての説明

第2次（2時間）の指導内容

- ・自分の好きな音を表現させる。

第3次（2時間）の指導内容

- ・互いに聞き合い，即興表現させる。

4. 学習指導の展開

◆評価の観点

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
＜第1次＞ 題材の提示	即興演奏とは何か、理解する。	・即興演奏の定義をするのではなく、実際の学習内容について説明する。「何でもよいから、自分の好きなように演奏するように。ただし聞いたことのある曲にならないように。」
楽器の説明	使用される楽器の使い方を理解する。	・一つの楽器でもいろいろな音が出せることを示す。
使用する楽器：大太鼓，小太鼓，シンバル，トライアングル，タンバリン，カスタネット，鈴，ウッドブロック，木魚，クラベス，マリンバ，ビブラフォン，電子鍵盤楽器，シンセサイザー，ピアノ等		

<第2次> 範奏 音を出す	◆自由な雰囲気学習しているか。楽器の出すさまざまな音に興味を持ったか。	
	これからしようとする学習の内容を理解する。 2, 3人がグループとなって授業者とともに即興演奏をする。礼をして始め、グループが「終わりだな」と感じたら、礼をして終わる。	・誰でも簡単に演奏できるような音形で示す。 ・音を出すきっかけをつかませることで即興演奏をリードしたり補助したりする。余裕が出てきたら、第3次の内容を暗示するような演奏を行う。なお、グループ分けには、席順を利用したり、籤を利用したりして、なるべく毎回変化するようにする。
<第3次> 互いに聞き合い、即興表現する。	◆オリジナルな演奏を心掛けているか。	
	2, 3人がグループとなって即興演奏する。	互いに聞き合うように心掛けさせる。掛け合いをすることも提起するが、強制的にならないよう、自由な雰囲気を保つよう、発語に留意する。
◆互いに聞き合っているか。のびのびと表現しているか。		

5. 指導に対する考察

この音楽活動では、生徒たちがのびのびと、本当に楽しそうに演奏をする。最初はこわごとリズム楽器に触れているだけだった生徒でも、だんだん慣れて、さまざまな音を出すようになってきた。

しかし、生徒に本当に音楽の喜びを感じて活動させることは難しい面もある。何故なら、「授業なんだから、遊びをしないでくれ」「先生、これ楽でいいよ」というような感想が生徒から出ることもある。今後更にこの音楽活動の意義を理解させる工夫が重要である。

しかし、ほとんどの生徒がこの授業を楽しんでいることは事実であって、そのこと、つまり楽しむことがこの事例の指導目標を達成するにあたってもっとも大切なことであり、学習成果があったと考えたい。また、すばらしい即興演奏がなされたときの演奏者の顔の表情、聞く側の拍手は、まさに生徒の感動の現われであった。

IV まとめと今後の課題

本年教育研究員は、音楽活動をより活性化させるためには、教師と生徒はもちろんのこと、生徒一人一人のコミュニケーションを緊密なものとするのが不可欠であると考え、そのための学習形態としてグループ学習を重視し、「音楽活動を活性化させるための効果的なグループ学習の在り方」を研究主題に定め、研究を進めた。

本研究では、まず、音楽学習にみられる生徒の状況を、今日の生徒を取り巻く社会、音楽環境等を視野に入れながら把握することから開始した。その結果、次のことが考えられた。

- 生徒の音楽的関心が多様化している。
- 人に一緒に歌を歌ったり合奏したりすることに感動を示さない傾向が増加している。
- 音楽によって人間関係を深めたり、お互いの感性や気持ちを伝え合うという、いわば音楽のコミュニケーション感覚を実感する機会が少ない。

ここに示した第3点は、本研究で特に重視した点であり、音楽授業の中でどのようにして解決していくかが重要な課題となった。

生徒の音楽的関心の多様化に対しては、楽器、曲目等の選択幅の拡大や学習内容の個別化等の工夫が考えられる。しかし、音楽のコミュニケーション感覚を実感するためには、音楽の共通体験の場の設定が必要となる。ここに、音楽授業における活動の個別性と集団性との調和が課題として存在しているのである。

この課題に対して本研究が目指したのがグループ学習の導入である。

グループ学習については、その意義や効果などを次のようにまとめることができた。

- グループ学習の意義や効果：グループ学習は一人一人の感性が発現される場を生み出す。
- グループ学習の形態：アンサンブル活動、創造的音楽づくり、課題学習等。
- グループ学習の指導：生徒が自分たちで模索しながら発見していく過程を尊重する。
- グループ学習の評価：評価に当たっては、能力、知識の獲得達成度より、体験によってもたらされた生徒の内面の深化や音楽的成長に重きを置く。

以上のような理論的研究に基づき、実践研究を行い、「リズムアンサンブル」「合唱」「自分の得意な演奏で合奏」「バリ・ガムランによるアンサンブル感覚の育成」「リコーダー、ギターの重奏・合奏」「現代音楽的な即興演奏」の6事例を示すことができた。これらの事例においては、グループ学習の指導の場面をできるだけ具体的に示すとともに、生徒相互のコミュニケーションが深められるよう、場の工夫を重視した。

今後の課題としては、次のことが考えられる。

- 表現及び鑑賞の活動の中で更にどのような場面で効果的なグループ学習が可能であるか、一層の研究開発を行うこと
- グループ学習の意義を教師自身が一層深く理解し、指導の場面で生徒に対し、一層、適切な助言や援助を与えたり、意欲を重視した評価を行えるようにすること